

知恵と工夫の結晶 ～オータムフェスティバル～



秋から冬へと季節が変わってきているのが感じられるほど、朝の空気の冷たさがどんどんと増してきています。校長室から見える富士山も、真っ白な雪の帽子をかぶり、一段と明るく輝きながら、何ものにも動じない堂々とした姿を見せています。

さて、秋の文化的行事であるオータムフェスティバルを、11月19日(金)・20日(土)に開催し、無事に終えることができました。保護者の皆様には、子供たちの成長を間近にご覧いただける機会となり、少しは、ご安心していただけたのではないのでしょうか。運動会の時と同じように、ご観覧いただくための工夫や取組にもご協力をいただき、混乱もなく終えられたことに、改めて、御礼を申し上げます。ありがとうございました。

<2つのこだわり>

今回のオータムフェスティバルでは、様々に制限されている教育活動の中で、大切にしたい部分として、私の中で2つのことがありました。

1つは、新型コロナウイルス感染症拡大予防の対策です。体育館という閉鎖的な環境の中で実施するためには、子供たちに日常的に努めてもらっている「あい・て・ます・か」の取組である、人と人との距離、手洗い、マスクの着用、換気の4つをクリアすることでした。

人と人との距離については、座席を指定席にすることが1つの有効な手立てとなりました。また、演技をする場所を正面舞台の1つにせず、体育館の周囲を使用することで、子供たち同士においても、密な環境を回避することができました。

次の手洗いは、すでに習慣化してきていることやアルコール消毒等で対応ができました。すでに、新しい生活様式の中でも定着をしてきていることでもあり、助かりました。

マスクの着用については、やはり飛沫をできる限り飛ばさない観点から、着用して行いました。体育館という環境では、声が聞こえるように指導をしていくためにも、マスクの着用は必須であり、今回は、合唱においても、手話や演奏主体に切り替えて取り組みました。また、舞台上で大きな声を出すことも、できるだけ避けることにも工夫をし、アフレコのような声の吹替え的な活動を多く取り入れています。なかなか難しい演技であり、全学年ができるとは言えないものでしたが、子供たちや先生方の熱心な指導と工夫で新しいスタイルの演技が展開できました。

換気においては、十分に空気の入替えを行えるようにするために、できる限り暗幕を使用せず、地明かりで行えるように努めました。また、窓やドアについても、開けられるところは開けて実施することもあり、大いに寒さが気になるころでした。幸い、本校の体育館には、暖房機器が設置されており、あまり寒くない状態で実施できたことは有り難いころでした。

以上のような新型コロナウイルス感染症への対応を検討し、手探りではありましたが、実施することができました。

もう1つ、大切にしたいと思っていたこととしては、縦割り等の異学年の交流が大きく制限されている中であって、何とか学年間の交流として対応できないかという思いでした。

運動会の時も、会場が外である運動場であることを活かし、全児童で鑑賞ができる児童鑑賞日を設定して、各学年の演技を見合いました。

やはり、自分よりも上の学年の姿を見ることは、下学年の子供たちにとって、上学年の子供たちへの憧れとなり、模範となります。つまりは、知らず知らずのうちに次の学年の姿を知り、視覚的な記憶となります。また、秋に行われる文化的行事は、各学年における体の成長はもちろんのこと、心も様々に動く時でもあり、心身の成長を感じながら、未来を知り感じる時でもあると思います。

実際に児童鑑賞日は、1年生と2年生、3年生と4年生、5年生と6年生という風に、低・中・高学年のそれぞれが、お互いの姿や演技、演奏を見聞きし、様々な準備等の裏方の様子まで知ることを通して、下学年は、上学年の楽しそうで、それでいて、自分の任された演技や担当に対しての懸命な取組の姿や様子から、憧れや凄さを感じ取っている様子がありました。

裏面へ続く

<各学年の演目から>

一年生

1年生は、「ともだちといっしょ」とのタイトルで、学校の放課後の様子をダンスや合奏で表現しました。表現の内容も子供たち一人一人に応じた内容となっており、一学期の運動会の時とは見違えるほどの体の動きや取組に対する姿勢が見られました。ハンドベルの演奏では、音を鳴らすタイミングをしっかりと合わせた演奏で、体育館中に響き渡る綺麗な音色でした。また、手話による表現では、子供たちが心を込めている様子が目の表情から伝わってきました。

二年生

2年生は、タイトルが「海と山のカーニバル」となっていて、国語の学習のスイミーを題材に、自分が表現する海の生き物になり切っていて、一人として同じ動きがなく、よく考えていることが分かりました。また、演奏をする際には、一人として音を鳴らすこともなく、音がないところも演技の1つとして、しっかりと意識されていることが分かりました。更には、退場するところまで練習しており、観客を意識した全てが出番のような構成になっていました。中学年に向かう2年生の成長の姿がありました。

三年生

3年生は、「変装！王様フィーバー」というタイトルで、体育館に設置された5つの舞台を十分に活用した演目でした。それぞれの舞台でそれぞれの役割が設定されていて、演目が進んでも物語が分かりやすくなるように配置されていました。ダンスがメインの舞台、調理器具を使ったリズム音楽の舞台、各楽器の紹介の入った合奏メインの舞台があり、よく練習されているのが分かりました。体育館中がまるで1つの舞台のようで、見ている観客も舞台の中にいるかのような工夫された構成でした。演技も面白く、自分の役をよく理解した3年生らしい、生き生きとした舞台でした。

四年生

4年生のタイトルは、「四年のビミョーな物語」で、サイレント映画に挑戦していました。周囲の舞台をアフレコの現場に見立て、リアルタイムで映像に合わせたセリフや効果音を発して、昭和の初期を思わせるような工夫に満ちた取組でした。また、リハーサル、児童鑑賞日、保護者鑑賞日と経つにつれて、演出が少しずつ変化をしていて、保護者鑑賞日の発表が一番の山場の演技となりました。タイトルにあるビミョーという言葉の通りに、フィクションであることを前提とした楽しさあふれる映像とアフレコは、しばらく脳裏から離れないものとなりました。

五年生

5年生は、「ピンクのカラス」というタイトルで、舞台の演技に対し、リアルタイムでアフレコをするという、かなり高度な取組と演目となりました。また、内容においても自分たちの生活環境を意識したものとするため、谷保の地名等をセリフに取り入れて、単に学芸的に表現するだけのものだけでなく、SDGs(持続可能な開発目標)的な意味合いのこもったものとなっていました。鑑賞された教育委員の方からも、環境問題的な内容に対して感心の声をいただきました。来年度の最高学年に向かう5年生として、また、周年記念の年の6年生として、期待が高まった内容と演目でした。

六年生

最高学年である6年生は、「不滅の絆」のタイトルの下、一致団結した演技と内容で、見ている人たちに勇気と希望を与える、『さすが、七小の最高学年』という姿でした。社会の学習を通して知った古事記の天岩戸の物語を現在風にアレンジし、そこにアニメ「鬼滅の刃」とコラボさせる内容にしたところも、これからの時代を生きる子供たちにぴったりでした。更には、最後のところで「紅蓮華」を演奏し、リハーサルよりも更に高まる演奏を、児童と保護者鑑賞日の両日に渡ってやり遂げました。音楽的な舞台を何度も経験した私ですが、2日間連続でモチベーションを保つことは簡単なことではありません。来年、中学生となる6年生の可能性の輝きを感じさせてくれました。

校長のつぶやき

～子供たちの未来への一步～

2年間にも及ぶコロナ禍においては、これまで当たり前に行われてきた教育活動が延期や中止になる状況が続いてきました。今回のオータムフェスティバルは、子供たちのもつ今ある力を存分に発揮し、そして、未来を生きる子供たちの様々な希望あふれる夢や可能性を、私たち大人に見せてくれたと思っています。この先の未来は、決して平坦なものだとはいえません。

けれど、今の子供たちがもつ力をさらに高め、前を見た取組を展開していく時、未来は、決して悲観するのではなく、明るく前向きに捉えることができると思います。未来を知りたいければ、現在の因を知ることだと私は常々と思っています。今を大切に、生きていく力を高めていくことこそ、学校教育に求められているものではないかと考えています。